

フーゴ・ヴォルフの《メーリケ詩集》におけるリート作曲技法
：詩の韻律と歌唱旋律の関係の分析
稲田 隆之

本論は、フーゴ・ヴォルフ Hugo Wolf (1860-1903) の歌曲集《独唱とピアノのためのエドゥアルト・メーリケによる詩集Gedichte von Eduard Mörike für eine Singstimme und Klavier》(1888、全 53 曲、以下《メーリケ詩集》) における詩の韻律と歌唱旋律の関係を分析することによって、ヴォルフの作曲技法を明らかにすることを目的とする。De la Motte 2002 の分析法を発展させたかたちで《メーリケ詩集》全 53 編の詩の韻律を分析した上で、詩の韻律と歌唱旋律のずれを抽出した。そのずれとは、Senkung (抑格) が拍の重点をとり、実行されるべきHebung (揚格) が実行されないことである。

《メーリケ詩集》におけるこうしたずれが生じる原因は大きく 2 つに分類できる。第 1 に、詩において基調をなす韻律が詩的表現のために変化された際に、音楽がそれに対応していない場合である。ただし、そうした詩人の意図を歌唱旋律に活かすのがヴォルフの作曲上の基本的立場であるため、こうしたずれは多くない。このときヴォルフは、基調となる音楽的動機の統一性を優先させている。第 2 に、韻律と選択された拍子の関係にずれが内包されている場合で、この場合はさらに 2 つの関係に分けられる。すなわち、(1) ヤンブス詩行による民謡詩節 (3 ないし 4 脚による 4 行詩節) と 8 分の 3 拍子や 8 分の 6 拍子の関係、および (2) 5 脚のヤンブス詩行と 4 分の 4 拍子または 2 分の 2 拍子の関係、である。

ずれが生じる理由は複合的なものだが、今回の分析の結果、そのずれは、ヴォルフが詩の表現内容と韻律の関係を積極的に解釈したことから生じたものであることが明らかとなった。そしてヴォルフは、とりわけ 5 脚のヤンブス詩行に作曲する困難さと向き合うことで、韻律と歌唱旋律を結び合わせる手法を確立したと考えられる。